

Title	都市の時間
Author(s)	一野, 千夏
Citation	国際公共政策研究. 2005, 10(1), p. 105-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6031
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

都市の時間

Time in the City

—野千夏*

Chika ICHINO*

Abstract

Spatial policy is common, but time has not been seriously given thought in the field of urban policy. This paper, therefore, focuses on the city and its policy from the viewpoint of time to review the validity of policies which have been taken for granted. In spite of the fact that there are varieties of conceptions of time human beings use in general, the statement here covers the passage of time which is most widespread and accepted in the modern society---past, present, and the future---in relation to daily life, systems and institutions.

キーワード：時間の価値とリスク、時間の多層性、行為のプロセス、間主観的想像力、主体的な時間

Keywords : Keywords: value and risk of time, diversified and layered time, process of action, intersubjective imagination, definition of time by autonomous body

* 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程

本稿では時間との関わりを通して都市と都市政策について見ていきたい。政策に時間概念を導入する見地から、都市の時間としての歴史や未来、今を生活や空間、制度、組織などと関連づけつつ、どのように時間の幅を広げていくことができるのかを考える。¹⁾ 人が使っている時間の概念には様々な種類があるが、ここでは紙幅の都合上、過去、現在、未来という単線的ではあるが最も生活に浸透していると考えられる時間に絞って検討する。²⁾

1 都市の過去から現在へ

歴史—与えられた時間

都市には歴史がある。人が集住をはじめ、建物を築き生活を営みはじめてから現在までの時間が都市の歴史である。数千年の歴史をもつ都市もあれば、これからという都市もある。それぞれに流れている時間はその土地と結びついた独自のもので、文化とも呼ばれる。建造物など形あるものとして佇むものもある。今、その都市に生きる者にとって歴史や文化は与えられたものである。

かといって、過去の経験が現在の行為をもたらしているのではなく、過去の決定が我々を現在の状況に導き、過去の人びとが選び取ったものが現在に続く伝統となり、捨てたものは過去の遺物となった。過去が人の行為に大きな役割を果たしているのは、現在を定義づけ、行動を方向付けるからだ。しかし、「歴史」はその後の時間に保証を与えてくれるわけではない。過去は遺産となることもあるが環境破壊のようなツケを残すこともある。かつて工業が栄えた都市が、時代が変わり失業や環境問題に悩む姿が見られるような類のツケである。³⁾ 現在、過去についてできることは、ただ何を遺すかを選ぶことができるだけだ。一方で、都市の昔からの住民は、過去の記憶のためにそれにかわる何かの存在または意味を思いつかず、それが新たな都市の姿や変化に対するハードルになることもある。

- 1) 都市空間については広く論じられているが、都市と時間の関係についてはあまり顧みられることがない。都市の文脈において時間は歴史学や地理学が研究対象としているし、その他の場面で時折時間について言及されることがある程度である。都市をめぐる時間の視点からの研究は、生活時間を対象とするもの（荒井良雄、1996）、持続可能性の観点で考えているもの（海道清信、2001）、ライフサイクルへの配慮が窺えるもの（C.Alexander, 1977；C.Landry, 2000）に大きく分類できる。
- 2) 人びとの移動範囲が共同態の内部であった頃は生活に切り離せない行為の目的や必要性に基づく何かをするための時間として受けとめられ、活動範囲が広がると、時間は異なる共同態を仲立ちする媒体として働いた（真木悠介、1981）。「腹時計」のように、現在でも人はカレンダーや時計の時間と異なる時間を日常的に使っている。時計時間は、時計の普及、科学的管理法の普及、交通・通信の発達などにより普及した（橋本毅彦、栗山茂久編著、2001）。
- 3) かつて鉱工業の町として栄えた過去をもつスペインのビルバオ市もそういう都市のひとつである。グッゲンハイム美術館誘致による文化都市への転換、過去との訣別による都市の再生に賭けた。ただ、人目をひかずにいないその姿も町の全景の中では浮きあがって見え、むしろ近くの地方美術館とその脇の公園の方が市民に親しまれていることから、過去と選択した現在の調和には時間がかかるのではと感じさせられる。

歴史の重層性

都市において、過去は建造物という形でも蓄積され、よい意味でも悪い意味でもその上に都市の現在がある。このように、都市においては、複数の時代の重なり合いを建物に見ることができる。そこを歩く者は、無意識のうちに時間の推移を感じさせられる。そして、それ自身都市の潜在的な力である。

だが日本の場合、大都市では震災や戦災等により古いものの多くが消失し、時代の重層性や歴史の積み重ねを感じにくい。⁴⁾ 中には京都のように大きな戦乱による被害を免れたおかげで古いものが比較的残っている都市もある。そういう場所では古いものと新しいものの共存が見られ、それらの共存が課題となる。⁵⁾ ただ、歴史的、文化的価値が公的に認められれば古いものは残されるが、そうでなければ開発の波が押し寄せて生活に身近な場所から淘汰される。それゆえ古都と称され日本随一の国際観光都市を標榜する京都ですら、町並みに歴史が醸し出す風情を感じ取れるのは一部の地域に限られてしまう。それは観光客数世界一を維持しているフランスのパリのまちなみや文化財と単純に比較すると汚点と言えるかもしれない。⁶⁾

「ヨーロッパは過去を強く引きずりながら近代を生み出してきたのに対し、日本は過去を捨てることによって近代化を達成した」⁷⁾ という指摘があてはまる場合が多いのは否めない。ヨーロッパでは古い建物は歴史的な重要性から制約がかけられて自由に壊すことができず、外観は保存し、内部は機能的に使えるように質の向上を図られることが多く、その意味で比較的多くの場所で時間の重層性が見られる。かつて宮殿だった建物が博物館や市役所などに転用されている例も多い。⁸⁾ 宮殿でなくとも歴史的価値が認められる建物は保存の対象とな

4) 日本では、古都保存法に基づき指定された古都における歴史的風土特別保存地区が、文化財保護法に基づき伝統的建造物群保存地区が、歴史的な環境保全の対象になっている（中村賢二郎、1999）。しかし、それらは限定された地区であって、いわゆる「大都市」では近代的な建造物や景観が「都市の顔」となり、モダンなまちなみが広がっている。

5) 法制度や税制、市民参加などの課題が指摘されている。（西村幸夫、1997）

6) フランスへの観光客は7500万人で世界一（2003 世界観光機関www.wto-osaka.org）。フランスへの観光客のほとんどがパリに入るのでパリは世界一の観光都市である。観光の目的地となる要因は景観だけではないし、美観の基準も人によって異なるが、京都における国宝、重要文化財としての建造物は331件（603棟）（2004.8月現在 文化庁www.bunka.go.jp）に対しパリの歴史的建造物は1776件（2003.12月末現在 在日フランス大使館に照会）で、京都市の面積610.22k㎡に対してパリ市は105.40k㎡なので、単純比較しても訪問客に与える印象に較差が見られると考えられる。ここには両者の歴史と開発に対する認識の差が現れていると考えられる。開発内容が周囲との調和を考慮したものであれば話は別だが、優れたデザインには配慮されても、まちなみの一部としてのあり様に配慮されることは少ないため混沌が生じやすく、都市の個性につながりにくい。

7) 鳴海邦碩他（1999）133頁。

8) パリのルーブル美術館はかつての宮殿であり、以前は国の省庁が一部を使用していた。コレクションの再編や収蔵庫の増加、地下駐車場、ショッピング・アーケードさらにガラスのピラミッドの建築による機能性の向上など15年がかりのプロジェクトにより、古いものを遣しつつ新たな定義づけによってより質の高いものをつくらうとした代表的な例で、過去を現在につなげようとする時間の複合が見られる。

り、デパートやカフェのような人びとの生活に近いものも含まれる。⁹⁾ 古いまちなみが遺された旧市街地の周囲に新市街地が広がる都市も多く、そういう場所では建造物だけでなくまちなみにも歴史の重層性を見てとることができる。¹⁰⁾

もちろん、過去は消去して現代風のものをつくる方が容易であるが、それは時間の一元化を志向する意識に基づくものだ。都市が経てきた時間を歴史として尊重するなら、過去の時間を抹消したり博物館に移してすますことはできない。テーマパークのような形で過去を復元しても、それはむしろ消費と結びついた隔離された過去であり、そこに歴史の重層性を感じることは難しい。そこにあるのは擬似的な過去であって、現在の日常とつながらない、現在のまちなみの中に遺された過去とはまったく別物なのである。¹¹⁾

都市の風景として映し出される時間を浅薄なものにするよりは、状況に応じた建造物や景観の保全による過去と現在、さらに来たるべき未来との共存を図るため、人びとに高度な技術や知恵を要求することを通して、様々な時間を複合した都市をつくる方が意義が大きい。浪費をもたらす創造と遺産となる創造を区別し、前者の割合を徐々にでも減らす努力は都市の持続可能性を高めることにも連なる。

また、建物だけではなく、祭りなどは過去の歴史としてではなく今なお繰り返されて現在につながっている。名の知れたものでなくとも、家の近所の小さな神社の祭りや縁日にも歴史を形づくる文化としての姿が見られる。人びとの生活から切り離され、博物館の中でガラス越しに保存、鑑賞されるのではなく、今も生きて通りを行く人びとが目にし、使われていることが「生きた」歴史をつくっていく。その中から個々人の物語がつくられる。こうして時代を超え世代を超えて文化が形象化され、受け継がれていくのである。

過去を過去の姿のまま保存することではなく、過去という与えられた時間に意味づけをし、「私」にとっての歴史をつくることの積み重ねが都市の歴史であり、それが人間の自律的な能力を発揮することの意味である。伝統がすたれてくると、歴史の循環に頼ることができず、より主体的にセルフ・アイデンティティを確立していくことがますます必要になってくる。しかし、創造性は破壊によってゼロからつくる新たな創造だけでなく、過去を踏まえ、受容しつつ新たなものを生み出していくところに、むしろ多く見られるといえよう。

9) フランスの場合、歴史的環境の保全が1913年法による歴史的建造物の指定と登録による保全からはじまり、その後歴史的建造物の半径500m以内の環境保全(1943年)、景勝地保全(1930年法)、保全地区制度(1962年法)、建築的・都市的文化遺産保存区域(1983年法。1993年に景観的文化財が追加)等の導入により、広い領域が保全の対象になっている。しかし、フランスにあっても、国家の法律のみでは身近な建物や界隈が破壊されていくのをとどめられず、基礎自治体レベルの一般的法定計画である土地占用プランによるまちづくりが図られている。(烏海基樹、2004)

10) 日本では、高度成長期の大規模開発への危機感から文化財の保存のための市民運動が繰り広げられ、以後町並み保存、都市景観の整備へと、点から線、面、ネットワーク化の方向に進んできた。(西村幸夫、1997)

11) 未来や空想の世界を題材とするものであっても、それらが擬制的な時間を表現するものであり、現実を離れた非日常であるという意味では同じである。

2 今という間

今の長さはまちまちだ。そもそも、「今」という言葉は時計で計測すれば、数秒の短い時間も、数時間、数年という期間も表現できる。「今」がそのような幅をもっているにもかかわらず重要な概念であるのは、人びとの意思決定に関わり、行動を規定する「時」であるからである。今は過去と未来にはさまれたあいだの時間として、流れている時間でもある。¹²⁾ 都市にとっての今は、人びとの生活が進行する日常である。都市の様々な場面で観察できる日々の周期的な変化は、都市のデイリー・リズムと呼ばれ、日常的にそれが繰り返され、進化している。都市にはそうした固有の時間とリズムがある。

24時間都市

時間によって大都市の繁栄を象徴するイメージとして、「24時間都市」や「眠らない都市」という見方がある。とはいえ実際の都市では夜間外出率に現れているように、大都市では公共交通機関への依存度が高いため夜が早く、最終電車で左右されない地方都市の方が遅くまで人びとが活動している。¹³⁾ このように都市の活動時間は、交通手段に大きく左右されている。¹⁴⁾

パリやロンドンのような都市では、一部で24時間、公共交通で活動できるということ言えるが、それでこれらの都市が24時間都市かというところでもない。オール・ナイト営業の娯楽施設や店舗がたくさんあるというわけではなく、都市の一部で活動が行われていたり、それが可能であっても、夜中には人びとの多くは眠りにについている。

一方、日本とヨーロッパの都市を比較して、彼の地で人びとが仕事の後の時間を有効に使って余暇活動に勤しんでいる姿に倣って、劇場やレストランの営業時間をずらし、あるいは交通機関の営業時間延長をして外見を整えたとしよう。それは多少の消費拡大につながるかもしれないが、それに伴う費用は人件費だけでなく空調や電気などに充当する光熱水費も要求する。過度の労働は健康を損なうこともある。それゆえに、必ずしもコストに見合う利益や、ひとりひとりの市民の豊かな都市生活が約束されるわけではない。

デイリー・リズムに見える時間概念の違いは、ひとつはメリハリの有無に現れている。日

12) 今は過去との対比によって浮かびあがってくる概念である。たとえばベルクソンは、時間の本質は数量化=空間化され得ない精神的、霊的持続にあり、ひとは持続を、それが繰り返されるのに応じて、生きることができるだけだとしている。(Henri Bergson, 1889)

13) 橋本毅彦、栗山茂久編著(2001) 310頁。

14) その一方で、都市には交通機関にも現れているような独自の時間のリズムがある。たとえば、大阪とパリでは地下鉄の始発電車と最終電車の時刻には4、50分の時間差があるが、実際に運行されている時間はさして変わらない。人の活動時間のずれがそこにあらわれていると考えられる。

曜営業店舗は中心街や繁忙時期などに限定されると、常時開店のために交替制でべったり働くのとは、利便性に対する認識の違いがある。便利さが手に入ってもそのために支払う犠牲も小さくなく、交替制ならまだしも、一人の人間が平日は遅くまで残業し、休日も出勤するという働き方が当然視されているような場所では、時間はともするとだらだらと流れているように見えやすい。

早朝から夜遅くまで、週に一度の休みもあるかないかのように働くという人にとって、都市は仕事の間でしかない。そこで、自由時間を増やすために、勤務時間を減らそうというのはもっともであるが、人びとの活動と時間のずれは、様々な制約とともに価値観にも基づいている。¹⁵⁾ 単純な時間の増減で人びとの活動が変わるとは考えにくい。¹⁶⁾

効率や消費と結びついた時間概念からすれば、時間の使い方として、昼も夜も、能うなら24時間をフル活用しようという発想が出てくるのは当然の帰結なのかもしれない。しかし、時間の消化や消費は必ずしも人を自由にはしてくれない。個人にとっては、一定の時間の中で満足が伴う行為ができるか否かに意味がある。仕事の後の時間をどう使うかは、それぞれの志向と制約に左右される。制約の少ない人の活動を基準にしても、制約の多い人はそこから排除されてしまう。

活気があるということや常に動いているということと考えるならば、活気のある都市の中で、たとえ人びとが交替で働くとしても、都市自体は休みなく動いている状態が続くと考えられる。無論そういう都市があってもよいし、都市の一部がそのような場所になることは考えられるが、それは少なくとも生活の場にはなりえない特別な場所である。いつでも遊べる場所は裏返せば誰かが常に働いていなければならない場所である。都市は24時間稼働する工場ではない。メリハリに欠けるまま徒に消費する時間を拡大することはその一方でどこかにしわ寄せが生じ、拘束の拡大につながる。人やエネルギーの消費をいたずらに増やすだけでは意味がない。客体化された時間を最大限に使うということは、消費の時間、人が消耗す

-
- 15) 地理学者ヘーゲルストランドは一連の線で表現される人びとの動きの軌跡であるパスという概念を導入して、人の1日の動きを捉えようとするともに、人が社会で活動する際に受ける様々な制約を三つに分類した。それぞれ、生物学的な特徴と道具や技術の両方にかかわる能力の制約、時間的空間的な条件である結合の制約、管理領域に入る許可の必要性などの権威の制約を意味する。これらの制約分析を実践的な問題解決につなげようとする方法は交通計画や施設計画の評価などに反映されている(荒井良雄他1996)。さらに文化のような価値観も制約となりうる。
- 16) 人にとっての時間の意味を認識することの方が意味がある。たとえば、ルーブル美術館では、開館時間や料金設定を曜日や時間によって変え、時間と人の活動の変化が小刻みに考慮されているが、それによって来館者の利便性は損なわれず来館者にもメリットがある。そこでは物理的な長さにより時間の質が測られてるのではなく、人の行為と関連づけられ、時間の人びとにとっての意味の違いが認識されている。ルーブルの場合は多数の展示品とスタッフ、来館者の存在など恵まれた条件に支えられている例ではあるが、スタッフの数や美術品の維持目的で、時間によって開放スペースに制限をかけるような時間使用法もある。来館者に若干の不便をかける面はあるが、それもある意味では時間の柔軟な使用と考えることができる。
- 日本では、交通機関の料金設定で回数券利用者に時間による多様性をもたせる例や、公共機関の一部窓口や施設のオープン時間の延長などに時間の差異を認識していることが現れはじめているものの、その適用が一律なために無駄を生じさせ、柔軟性が感じられないことが多い。

る時間を増やすだけに終わらせるリスクを抱えている。時間の均質化を志向する眠らない都市の実現、これを活力を増すことと同一視することは、あまりに人も人間の行動を無視した都市のヴィジョンと言えよう。

都市のデイリー・リズムと生活の多層な今

都市の中で一日同じ場所に佇んでいると、その場所に特有の人の動きが見える。

いろいろな場所で時間による人の流れに違いが見られることは、誰でも日常の経験から知っている。繁華街ではなく住宅街であっても、通勤する人びとや通学する子どもたち、ゴミ収集車、郵便配達などの業務用の車などの流れから時間を知ることができる。場所のアイデンティティが、そこにおける独自の時間の流れによっても見えてくるのは確かである。ただそれは人びとの生活時間に左右されるとはいっても、そこに住宅があるからそれに伴った人の流れができるというように、時間よりも空間の機能によって人の流れが変化するのである。したがって、空間の機能が画一的な空間は、いろいろな機能が混在している空間に比較すると、そこで見られるリズムはより単純なものになる。

逆に言えば、空間という広がりをもより豊かで多様なものにすることで、多様な広がりのある時間を創造することができる環境を整えることになる。

次に、個人の側から都市生活における今を見てみよう。個人の1日や1週間は労働条件、職場と自宅の位置関係によって、ある程度拘束され配分されている。休日は平日の疲れを癒すこと、あるいはどこかに出かけて消費することなどに利用される。余暇の過ごし方には独自の方法もありながら、様々なパッケージにしたがって時間を消化することもできる。そこで時間の空白を埋めなければというプレッシャーに押されると、疲労がたまっていても活動することになる。こうした日常の時間は消化し、消費する時間となっている。この時間は与えられたペースに従わねばならず、多忙を生む。

最近では、週休二日制の普及により休日は増えたかもしれない。しかし、仕事量が変わらずに、休日の増加分が平日に振り分けられていることもありがちだ。その場合、休日増が必ずしも自由時間の増加につながらない。また、娯楽関連の業務従事者のように、多くの人が休むときに働かねばならない人がいるという面でも、同様に、連休が必ずしも自由時間の増加につながるとは限らない。そこでは客観的な時間の増加が、主観的には増加と感じられないような状況が生じる。

生活には非日常と日常の切り替えが必要であり、都市には日常と非日常のどちらの時間も必要である。と同時に、どちらともつかない時間もある。社会の時間の裂け目の代表的な要素として祭があげられる。祭は四六時中行われていれば、その基本的な要素である非

日常性を失う。人間が意識する時間の流れは、変化によって生じる。メリハリがなければ変化はない。のんびんだらりと時間が流れても、それは単なる客体的な時間の経過にすぎず、人間の主体性とは乖離し、面白みに欠けたつまらないものになる。

また、仕事や家事をいかに効率よく行うかが人びとの課題となり、1日や年間のスケジュールの立て方が雑誌や書物で頻りに紹介される。しかし、タイム・バジェットやタイム・マネジメントのような概念も、いかに能率的に時間を使うかというだけに終わってしまえば時間を豊かにするものではなくなる。いかに個人の主体性を時間に織り込むかが重要である。日常の時間をいかにして豊かにするか、それは配分や消化だけでは不可能だ。

人生においても、就学年齢は法律によって決められ、決められた年限に沿って通学し、卒業もいくつかのパターンに分けられ、その後の就職や結婚、出産、退職などもパターン化されている。場合によっては幼少時から始まる受験、仕事のために入試や資格試験、就職試験を乗り越え、不時の備えのために貯蓄し、生命保険や損害保険に入り、老後に備えて年金を積み立てるなど、未来のために備える。¹⁷⁾

しかし、同年齢だからといって、同じ枠の中で同じことをする必要、誰もが標準という一元的な基準にあわせる必要はない。数字は平等のための目安のひとつにすぎない。時間が多少遅くとも早くとも、それぞれの独自性というものを尊重するならば、基準に惑わされることによる無用の不安は薄らぐ。たとえば、何歳まで仕事を続けるのかということも、個人によって違って当然である。一律に引かれた定年のような線に従うだけでなく、それぞれの流儀で続けたり、仕事を減らしたりやめたりという自由には難しさが伴うかもしれないが、主体的な時間を選びとれるということはそれ自体価値なのである。誕生から死に至る間は、時間を消化するものではなく、常に今を生きるプロセスである。

子どもは単なる大人の予備軍ではないし、高齢者は過去の人ではない。人びとの時間に価値の優劣はつけられない。様々の世代の人が、今という同じ時間を共有している。学業や労働や居住の場でそれぞれの時間を複数の世代が共有することは、時間の幅を広げはしても狭めはしない。時間共有によって豊かな時間をもっていること、これを確かめられる場を生活の中で増やしていくことこそ、現在の都市政策がまず意識すべき基点になるのではないだろうか。

与えられた時間制度の中で生活をしている人にとって、多層な時間をもつことがパッケージ化された拘束からの解放である。効率化によって物理的な時間的余裕が得られるのならば、

17) 社会的な制度は人びとの行動パターンに沿ってつくられている。たとえば、家族の典型として夫が外で仕事をし、妻は家庭を守り、子どもに手がかからなくなればパートに出かけるといった形態が、福祉や保健、税制、教育などの制度やその適用に暗黙のうちに反映されている。それゆえに、コースからはずれることは人びとに漠然とした不安を与える。

それをいかに創造的な活動に使うか、与えられた時間をいかに主体的なものにするか、これをどう定義づけしていくかが都市生活者の課題である。

3 現在から未来へ

都市の時間とリスク

時間はリスクを生む潜在性を有している。場所という固有の存在も時間の変化には抗えない。新しいものは、モノも制度のような仕組み、どんな結果を生むかよくわからないという意味でリスクを孕んでいる。一方、年月を経るとともにモノは古くなりあるいは壊れ、草木は生長する一方で枯れることもあり、人は成長しやがて死ぬ。状況の変異性、時間の不可逆性とそれを一瞬でもとめられないという現実、変化を受け入れることを迫る。

時間の観点からリスクを見た場合、なんらかの行為の結果が現れるまでに長い時間がかかり、誰も疑問を抱かず気づかない間に危険が迫っているものもあれば、すぐに結果が出る場合もある。¹⁸⁾ 結果はすぐに現れても、原因を予測できる場合とできない場合がある。予測できなければ、今では、人の移動空間が広がりを見せているために、短時間で広い空間に波及することを回避できないこともある。時間との競争の中で、情報の遅れが危険や被害を大きくすることもある。いずれにしても、無用の不安を広げないためには、事実を迅速に伝えることが重要になる。

あらゆる場面で、時間の推移が変化をもたらす要因のひとつである。将来予測には想像力が求められる。時間に伴うリスクの大きさを推測するには、それを自らの経験と結び合わせることでできる間主観的な想像力が必要である。それは絵空事を描くことではなく、個人の生活にとってどれだけのリスクがあるのかを、可能な限りの事実をもとに評価、判断することである。この感覚は他者から与えられる情報だけに頼っていると鈍ってしまう。

リスクが現実となったとき、どのような行動をとるのか。緊急の出来事ならば、人間がそのときにとることが可能な行動はそう多くない。短時間にあれこれできはしないのだから、重要度による選別が不可欠である。複雑なプロセスを考案することより、すぐにとらねばならない行動に、常々、注意を喚起することが必要である。たとえ、リスク回避に時間をかけることができる場合であっても、行動に優先順位をつけることは同様の理由で求められる。そのために、経験に基づいた間主観的な評価が必要なのである。

18) 前者には、たとえば地球温暖化のように、それが指摘されてから数十年を経て、環境問題の中で大きな課題として位置づけられるようになった問題が考えられる。後者は、天災をはじめ、生命の安全にとってより緊急性が高いものが多いと考えられる。

何が適切であるかは時間と密接なつながりがある。今よいと判断されていても将来どうかは別の話だ。時間の変化を考慮したうえでなおよいと考えられるもの、潜在する可能性を見分けるために、常に都市の政策や事業に伴う時間の変化を予測しなければならないし、政策評価は時間の要素を考慮したものでなくてはならない。

自然災害や食中毒、感染症、テロなどといったリスクについては、誰もがリスクとして対策を取らねばならないと考えるだろう。しかし、必ずしもそのように危険が明白でないところにも時間に伴うリスクを見ることができると。ここでは事業に伴う様々な時間とその重要性が窺える例としてデンマークにあるルイジアナ美術館に触れる。

開館は1956年からだが、その後、徐々に増築された。¹⁹⁾ 工事中も開館していたので、目立たないように工事が進められた。時間をかけて建設されたため、開館後の経験を活かすこともでき、時の経過に伴う変化を取り入れることを可能にした。ここでは、時間をかけてつくられたことで持続的成長をとげ、新しいアイデアを追加していくことが可能になった。逆に一時期にすべてを完成させてしまうと、後から手直しをするのが困難であるということも示している。これは建設時には予算がつくけれども、いったんできてしまえば使っている間に不具合が出てきても手直しをする予算がないというような状況の不合理性も示唆している。このように、すべてを同時に完成させるのではないから、様々な時点で造られた多様なパートが全体をつくっている。²⁰⁾

「新しい」ものがよいものだというのは、大量生産、大量消費が促した時間認識である。最初から質の高いものを拡張や転用を見込んで設計し、しっかりした維持管理のもとで、手入れを怠らないならば、時間の経過により一層価値を増すことができ、さらに人びとの愛着が増すかもしれない。²¹⁾ そこでは積み上げられた時間は消費された時間に優越する。

建物の解体には膨大な廃材が発生するし、新築には新たな資源消費が伴う。²²⁾ 資材の輸送

19) 第一段階の工事では3つの展示棟が建てられた。1966年から1988年にかけて段階的にニュー・ウィング、コンサート・ホール、サウス・ウィング、デッサンとグラフィック・アート用ウィング、さらに、子どものウィング、公共設備の充実とミュージアムショップの拡張がされた。(www.louisiana.dk)

20) この例のように広いスペースがない場合にはひとつの敷地の中で時間をかけて施設を建設するのは難しいかもしれないが、それでも建物の完成＝施設の完成というような捉え方ではなく、人が使う時間経過に伴い、そこから生じる様々な出来事や関係性がその施設の完成度を高めていくのだと考えれば、時間の経過を活かすことができる。建物の供用開始後の時間を、建設や改築のプロセスとして考えている。一方、日本における建築への時間の配慮は、せいぜい、近年、環境問題の重要性認識が高まった結果、建設時に環境負荷を減らす工夫による将来世代の負担の軽減が中心である。

21) 身近な関係者にとって愛着といった主観的、感情的なコミットメントは建物や施設の円滑な維持や運営にとっては等閑にできない起点である。

22) 産業廃棄物の業種別排出量で建設業は約2割、全建設廃棄物排出量のうち建設解体によるものは約2割を占める(平成12年(2000年)度)。たとえ、リサイクルが行われるにしても、寿命が短いほど無駄が多くなるのは当然である。建設リサイクル法などリサイクルを進める法整備もなされているが、設計や専門家の養成の段階でもライフサイクルの時間を考慮するとともに、門外漢であっても専門家と同様にリサイクルの必要性の認識を高める必要がある。

もCO₂排出量を増やしている。日本の住宅の平均寿命は30年程度であるが、そのペースで資源を消費することは未来の世代にツケを回すという時間リスクを冒すことをも意味している。²³⁾ それでは建築という名を冠した浪費になってしまう。

建設時に時間の推移を考慮していない建物は、時間の経過によって薄汚れてくるばかりである。それゆえに、ますます時間を経た後にそれを遺そうという気を起こさせない。さらに、建物の寿命の短さが前提にされると、手間やコストがかかるものは造られず、内側さえ必要な機能を満たしてくれれば、外側やまちなみとの調和などは問題外になる。

先述したミュージアムの建設のあり方や姿勢に窺える、変化を取り込める柔軟な時間認識を広げ、融通のきかない固定的な時間認識が当然である状況を脱することは、時間の変化に伴うリスクを回避し、時間を活用するひとつの手法なのである。²⁴⁾

人びとの時間

もうひとつルイジアナ美術館がユニークなところは、赤ん坊から高齢者まであらゆる人びとを呼ぶことのできる空間をつくりだしているということだ。²⁵⁾ 美術館という場所がかしこまってアートを鑑賞する時間を提供するだけではないという意味もある。

従来の都市計画には時間の認識が薄く、空間との結びつきが強いが、それでは人の行為が空間とともに時間も伴っているという現実の一面を見ないのと同じである。クララ・グリードは労働者や通勤者だけでなく親として、また家事や買い物する者として、また人生を通じて子ども、成人、高齢者としてもあらゆる人びとのニーズに対応するために、時間と空間の計画が必要であり、タウン・プランニングの目的や範囲の概念化の変化が必要であると説いている。²⁶⁾

とりわけ時間の観点からすると、現状では、女性は仕事と家事の両方をこなさなければならない状況で、男性より多忙である。²⁷⁾ ところが、都市計画では、企業や官庁において女性よりも多数派を占め、より収入が多い男性の論理が正しいものであり、当然のものであると考えられてきた面がある。そういう場合、収入の少ない女性や高齢者、子どもはより価値の低い社会で周辺に位置する弱者としてみなされる。

いったんそのような価値規範が確立されると、例えば勤務時間を考えるときに、超過勤務

23) 年齢や家族構成に応じて住宅を住み替える意識の薄さも、こうした傾向に拍車をかけている。

24) 公共物の予算が単年度主義という原則に拘束されているのは問題の一つである。

25) 最近、子どもを呼ぼうと努力しているミュージアムは増えてきたが、気兼ねなく赤ん坊を連れて行ける場所は少ない。育児に多くの時間をあてている親にとって、たまに赤ん坊を連れて閉じられた時空間から開かれた時空間へ外出することは、精神的な側面でもその意義は小さくない。

26) Clara H. Greed, 1999, p. 206

27) 矢野眞和編著 (1995)

は当然という勤務形態を基準としてしまうようなことになる。そこで、女性はフレックスタイムやパートタイムが多くなると想定され、逆に土、日、祝日勤務あるいは夜間勤務などがないことを前提にした公共施設配置が計画される。女性の経済的自立という観点から労働や保育政策の充実が志向されることはあっても、家事に関わる女性からの男性の自立という観点から、それらが問われることはあまりない。女性の経済的自立も重要だが、男性のどちらかといえば労働中心の単線的傾向の強い時間の複線化がなければ、女性にかかる負担は軽減されない。また、育児や介護が女性の仕事とみなされがちなために、労働を休む意義や重要性が認知されず、育児のためのやむをえない休業だけではなく、多様な経験を積む機会を得た後で復職できるような人生の複線化につながる制度も広がっていかない。復職後の時間だけではなく、退職後の時間という未来の可能性を広げることができるよりも、現在の収入を重要とみなしているという認識が基盤にある。しかし、貨幣を尺度とせず豊かな生活を送るには、労働中心の時間の中に、多様な生活経験のための時間を組み入れることが不可欠である。

また、誰もが年をとるという現実がありながら、高齢者は社会的な役割をほとんど終えた存在として周縁に位置するものとされる。²⁸⁾そこには強者の論理が働いているのではないだろうか。誰もがいつか死を迎えるけれど、病人や高齢者が死に向き合いながらどのように幸福に生き、その中で死んでいくかというようなことも、生産年齢の健康な人びとの時間を基準とすると、重要性がばやけ、時間は消費や金と結びつけられて処理される方がスマートだとみなされる。しかし、残された時間が少ないことを自覚している人は、そうでない人に比べて時間の使い方に敏感で、短くとも凝縮された時間や消費に変えられない時間を自覚している面もあると考えられる。

そのようにして今社会的に周縁に置かれている人びとの方が、金と直結した時間を超越する潜在性を有しているとも言える。中心と周縁のように、無自覚のうちに当たり前のものとして引かれた人びとの間の境界線を越えなければ、時間の層は広がっていかない。意識が時間を重ねることによって根づいた習慣も、また、リスクのひとつなのである。

組織と制度の時間

組織は固定されたものではない。しばしば実施される組織改編は組織名称を変えたり、業務の見直しに伴うものであったりするが、しばらくするとまた改めて編成が組み替えられるのが常である。それは改善を求めて行われることでありながら、その行為の結果は必ずしも

28) 仕事から引退すると、突然労働中心の時間から自由時間のみになるというような人生のいびつな時間配分も、年をとれば社会貢献できないといわんばかりの認識と相互に関連していると考えられる。

わかりやすいものではなかったり、形式は変わっても目的であるはずの内容の変化や意図された効果は得られていない場合も多い。

組織や制度にも常に必要なものと、状況によっては必要なくなるものがあるということには異論はないだろう。しかし、どれが必要でどれが不要なのかの判断が異なり、利害関係も絡んで不要とされることへの抵抗があり、組織をなくすには常に困難が伴う。ウルリッヒ・ベックは、「制度の死」という概念を認めない人は、臨床的にはとうの昔に死亡しているのに、いまだ死にきれない、そうしたゾンビまがいの制度を見落としているのだと指摘している。²⁹⁾ 社会的状況が大きく変化し、従来、前提としてきた実態がなくなっても、既存の制度や組織の存在は、社会の変化への対応を遅らせる傾向がある。

それは先述した過去のツケの一種であり、組織内部で慣習化した責任回避的な現状維持体質とそれを基盤とする画一的価値観によって、そこからはずれた提案などを握りつぶし、他人を排除する。枠外の問題、新たな課題や将来的な課題に対処することよりも大過なきことをよしとし、職業的倫理観よりも組織内の儀制的秩序が優先されるならわしにも起因する。組織における人事制度を見ても、同一部署、関連性の高い部門に継続してとどまることを志向する人事は、経験を評価基準とする一方で、組織として新陳代謝ができない構造を構築する。こうした組織においては、時間とともに、決まったやり方や特定の考え方が慣習化し、柔軟性が欠如していくことを認識しなければならない。³⁰⁾ このような硬直した組織は、場合によっては不祥事を生む温床となる。

また、個々の問題でみずからに課せられた任務が永久のものではなく、むしろ、時間とともに現れる新たな問題への対処を考えていかなければならない。時間が永遠に続くという前提のもとに行うのではなく、業務内容に応じて求められる一定の目標を達成すれば、その時点で組織を解消するような一時性をもたせることが、時間の視点から非効率というコストを減少させる方法のひとつである。ことと時間をセットのものとすることで、いろいろな行為をすべてとりこむひとつの時間ではなく、ある行為と一定の時間をつなげることが可能になる。それは、ひとりひとりの時間、状況と結びついた時間という、時間の多層化、多様化をもたらすのである。

都市計画の目標とプロセス

ヴァルター・ベンヤミンが、「遊歩者は空間の幻像に身を委ねるのに対し、相場師は時間

29) Ulrich Beck et al. (1994)

30) 組織は、組織としての明確な目的をもっているため、運営のために秩序を保とうと、自由が制限される。新たな成員が入ってくるにあたっては秩序に基づいて選択がなされ、入った後は秩序に従うことを当然視される。それらの要因が変化を妨げる。

の幻像に没頭する。投機は時間を一種の麻薬に変えるのだ」とオスマンの都市計画を批判したのは19世紀のことだ。³¹⁾ 都市計画は投機であってはならないが、その後もそこには投機的な、美しく、快適な未来が描かれてきた。都市の未来像としての都市の総合計画が、理想的、抽象的な内容になるのはある程度避けられないことかもしれない。しかし、設定された目標そのものに、大きな価値と意義があるのではない。その多くはきれいごととも言えそうなことなので、誰も反対しない。しかし、具体化の段階では、目標とする未来から現在に時間が引き戻され、設定された高尚な目標が矮小化される。実現可能性のない絵空事を目標とすることは非現実的である一方、実現可能な低い目標に矮小化されてしまえば意味がない。そうして美しい未来はなかなか近づいてこない。

未来も過去も今ここには存在しない。厳密に言えば、「今」は一瞬にすぎないが、未来も過去も現在との関係において意味をもつ。そして、その現在にも十人十色のパースペクティブがある。生活向上に不満を抱く人はいないにしても、生活の質の中味は人それぞれ異なる。計画が都市の多様性と個性、多くの市民に資するものなら、様々な利害関係が渦巻く現実で目標を成就するのが容易ではないのは自明のことだ。だが、そこをあえて描くことによって都市の未来像に向かうときに、重要なのは目標に向かうプロセスである。そうはいっても、計画当初から着地点が見え、期限も決められているような形式だけのプロセスはその主旨に反するものである。常に変化している現実計画が追いついていけず、融通がきかないために計画がうまくいかないことが多いが、プロセスを不可欠な調整過程とするならば変化も受け入れられる。³²⁾

目標に意味を与えるのは、それを人がどう定義づけるかということにある。³³⁾ もともと共有される定義があるのではない。各人各様の解釈と定義をもっているはずだ。重なり合う部分もあるかもしれないが、異なる部分はもっと多い。したがって、目標に向かうプロセスの中で共有できる定義を見出していかなければならない。単純な因果関係で都市はつくれない。

31) 今村仁司、三島憲一訳 (2003) 26頁。オスマン男爵 (Haussman) はナポレオン三世時代に県知事としてパリ大改造を行い、旧城壁跡につくった環状道路の内部を行政区として整備、再編するとともに放射線街路を建設した。遠近法が象徴的に使われている。ベンヤミンはオスマンによる取用でいかさま投機が横行、人口増加の一方で家賃が高騰、労働者が郊外へ追い出され、計画が財政危機に陥ったことなどをあげて非難している。

32) マンフォード (1938) は「都市の設計でより協力的な秩序を追及するとき、われわれが求めているのはより意味のある葛藤、より複雑で知性を刺激する不調和が生ずるような秩序」であり、「変化の攻撃、新しい理想の敵などに対して凍結しないような計画と建物が必要となる」と述べている。

33) プロセスを重視するcommunicative planningのプロセスではプランナーを含む参加者が皆で意味を創造する。これらの参加者は多くの種類の「情報」に依存し、形式的な分析的報告書や量的測定には主として頼らない。情報は徐々にコミュニティにおけるアクターの理解に組み込まれる。関係者全員がテーブルにつく。各人が十分、平等に情報を与えられ、利害を代表し、対等の立場で誠意をもって話し合いを行う。あらゆる要望と仮定を認める。話者は誠実かつ正直に話す。信用と経験に裏付けられて行動を話せる立場になければならない。わかるように話をする。科学的、あるいは他の有効な方法に基づく正確さが要求される。コンセンサスを求めなければならぬ。(Judith E. Innes, 1998) ただ、こうした理想的な条件がどのように成立するのかという点からすると、現実には理想との乖離や葛藤が予期されるが、理想の追求を排除を伴う過程にしないということを踏まえておかねばならない。

都市をつくることは、単なる人びとの行為の結果というより人が都市の形成過程に携わることである。その過程で方向性が変化し、定まり、具体化されていく。何かのはじまりと終わりは人が決めるもので、本来の時間には切れ目がない。そして、都市計画という目標に向かう時間の経過とともに顕れてくる行為のプロセスにこそ、多くの意味が見出される。計画の内容は結果の有効性に反映されるゆえにその使われ方に注意を向ける必要がある。³⁴⁾

プロセスは、個々人がどのような認識や解釈をもっているかをすり合わせていく過程である。何もかも手がけることは不可能だが、より多くの人が納得できる結果をもたらすためには、より多くの人のパースペクティブを知り、他者の立場になって考えることも必要である。それはまさしく間主観性の時間でもある。

このプロセスにおける方法を特定することは、結論を制限することにつながる。したがって、当初から関係者を限定したり、当局が望ましいと考える形式を選定するというよりは、随時最適な手段をとるといった柔軟性をもたせておくことに意味がある。都市計画に従事する専門家たちが、そうしたことを従前から知らなかったわけではないはずだ。ただ、理想的な方法は時間や手間がかかるために、妥協点として科学的と認知されうる手法がとられてきたのだろう。

専門家は分析結果を提示したり、正しい情報を伝えるだけでは十分でない。従来、計画はこれまでの経験を基につくられたり、先進的なモデルの模倣によって行われてきた。場合によっては政治的圧力に左右されることもあった。その結果は成功することもあったかもしれないが、とにかく話に耳を傾け、議論をつくすことがなければ、立派な計画が立てられても、そこに住む人びとのものとして受けとめられにくい。関連する情報を開示し、人びとの意志や発意を計画にとりいれ、反映させる。時計の示す時間ではなく、主観的な時間に耳を傾けることで、迅速さは失われるかもしれない。すぐによい結果は出ないかもしれないが、形式だけのプロセスではなく、専門家と住民が情報を共有することで、未来への不安を減らすことができる。

結果として残るものは誰もが確認することができるが、今のところプロセスはあまり表面には出てこない。しかし、計画におけるプロセスの重要性がより認識され、検討されることが、結果としての都市計画がより充実したものになるために必要であろう。

34) 結果は当初各人が思い描いていたものとはずれがあるだろうし、コンセンサスが得られたとしても内容自体に幅があったり、関係者間の理解のずれがあることが予測できる。そもそも完全な意見の一致は困難であることを認識することも必要である。

4 むすび-主体的時間の回復

共通の時間として時計が測る時間、物理的時間、幾何学的時間をもとに、列車や飛行機が運行され、組織の始業・終了時刻が定められている。ハプニングや事故で決められたスケジュールが狂うと、多くの人に影響を受ける。だからといって人は同時刻に目を覚まし、食事をし、就寝するわけではない。同様に、人の誕生から死に至る過程は各人各様のものだ。そこに見られる共通性だけを捉えるのではなく、違いを踏まえて考えることが必要である。

近代以降、直線的、単線的、不可逆的な物理的時間による過去、現在、未来が価値基準になってきた。しかし、すべての人、すべての時代、すべての世界においてひとしく真でありうるような時間概念などというものは、もともとありえない。³⁵⁾ 物理的時間の呪縛から解放されるには、人が主体的に時に関わり意味を付与していかなければならない。変化によって人は時間を知る。人は常に変化し、都市における人の流れも日々変わる。光や水、季節などの移ろいや動きは、同じ場所をも人の目には違うものとして映し出す。

カトリーヌ・グルーは、印象派の絵画を都市生活の表象に満ち溢れたものと捉えている。³⁶⁾ そこでは、移ろいゆくものの表現に関心が向けられ、運動が優位にあるために、中心という概念が消失し、単一の視点が存在せず、人の数と同じ多様な視点が現れ、そこではヒエラルキーが不在であるという。この空間的、視覚的な視点は時間にもあてはめられる。西欧で長い間支配的だった遠近法による写実的な表現を脱したとき、画家たちが絵の中に表現する時間も変わった。たとえば、クロード・モネの『ルーアン大聖堂』や『積み藁』などの連作に表現された色彩と光ははかない一瞬をとらえ、わずかな光の変化の中に時間の移ろいを感じさせる。そこにある生氣と夥しい色彩は画家が刻々と変化する時を写し取り、時間を凍結してとらえた主観的な印象である。写実的な絵が客観的な時間をとらえていたとすれば、印象派の絵は主観的な時間だと言えるかもしれない。しかし、それを見る人はそこに自らの視線を重ね合わせ、その一瞬を自らのものとして理解することも可能である。それが間主観性の時間である。主観的な時間や客観的な時間に閉じこもるのではない。そこに他者との接点ができる。

価値観の基準をひとつとすれば中心と周辺が生じずにはおれない。都市において、重層的な時間をもつことで、多元的な価値を認め、客観的な価値観と時間によってその地位を周辺に追いやられた主体的な時間を回復させることが、日常の時間を与えられたものから自ら定義づける価値ある時間をもつことにつながっていくのである。

35) 木村敏 (1982)

36) Cathrine Grout (1996) 66-67頁。

参 考 文 献

- Christopher Alexander.,〔1977〕 *A Pattern Language*, Oxford University Press (平田翰那訳
〔1984〕『パタン・ランゲージ』鹿島出版会)
- 荒井良雄他〔1996〕『都市の空間と時間—生活活動の時間地理学—』古今書院。
- Beck Ulrich, Anthony Giddens, Scott Lash.,〔1997〕, *Reflective Modernization-Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order-*, Polity Press. (松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳〔1997〕『再帰的近代化 近現代における政治、伝統美的原理』而立書房)
- Walter Benjamin, Ed. Rolf Tiedemann.,〔1983〕, *Das Passagen-werkI&II*, Suhrkamp Verlag. (今村仁司、三島憲一他訳〔2003〕『パサージュ論』岩波書店)
- Henri Bergson.,〔1889〕 *Essai sur les Donnée Immédiates de la Conscience*, PUF, (中村文郎訳〔2001〕『時間と自由』岩波書店).
- Clara H Greed, ed.,〔1999〕, *Social Town Planning*, Routledge.
- Catherine Grout.,〔1996〕, *L'art en milieu urbain Actualité de l'art, questions urbaines*, (藤原えりみ訳〔1997〕『都市空間の芸術—パブリックアートの現在』鹿島出版会)
- 橋本毅彦、栗山茂久編著〔2001〕『遅刻の誕生 近代日本における時間意識の形成』三元社。
- Judith E.Innes.,〔1998〕, "Information in Communicative Planning" *Journal of the American Planning Association*. Vol64 No1
- 海道清信〔2001〕『コンパクトシティ』学芸出版社。
- 木村敏〔1982〕『時間と自己』中央公論新社。
- Charles Landry.,〔2000〕 *The Creative City*, Kogan Page (後藤和子監訳〔2003〕『創造的都市』日本評論社).
- 真木悠介〔1981〕『時間の比較社会学』岩波書店。
- Lewis Mumford.,〔1938〕, *The Culture of Cities*, Harcourt Brace (生田勉訳〔1974〕『都市の文化』鹿島出版会)
- 中村賢二郎〔1999〕『文化財保護制度概説』ぎょうせい。
- 鳴海邦碩編著〔1999〕『都市のり・デザイン 持続と再生のまちづくり』学芸出版社。
- 西村幸夫〔1997〕『環境保全と景観創造 これからの都市風景へ向けて』鹿島出版会。
- 鳥海基樹〔2004〕『オーダー・メイドの街づくり』学芸出版社。
- 矢野真和編著〔1995〕『生活時間の社会学 社会の時間・個人の時間』東京大学出版会。